

研究発表会の授業について—指導主事の助言—

2年「かさこじぞう」：間 指導主事より

【単元構想について】

- 今回の授業は提案として、昔話のおもしろさとして3つの観点（言い方や言葉・登場人物・話の展開）で子供たちが何度も物語を読んでいくという単元構成を設定している。観点が変わるたびに、着目する言葉やおもしろさなど見方を変えながら学習が進められてきた。
- 教科書教材で付けた力を次の時間に並行読書で活用するという構成は、低学年にとっては大変有効であり提案性があった。
- 付けたい力に合った言語活動を設定するためには、まず教師が実際にやってみることが必要である。本時の作成物は、一目で「話の変化を捉えること」「そこから自分が考えたこと」を書くことが分かるような作りになっており、子供が見通しを持ち、主体的に学ぶための手立てとなっている。
- 単元の導入で、学習計画を子供たちと一緒に立てているが、これは、学習のつながりを教師も子供も常に意識していなければできない。資質・能力を自覚させながら授業を行っている証である。図書担当教員に協力してもらい、「昔話の貸し出し冊数を増やすためにおもしろさを教えてあげる」という導入をしたことで、子供たちが使命感、目的をもって学習に入っていくことができている。

【本時について】

- 本時は、「主体的な学び」を重点としていた。子供たちが終始、話の展開のおもしろさに着目しながら、自分の言葉でしっかりと伝えようとする姿が見られていた。特に、ペア学びの時にはどうということをお互いに伝え合うのかという見通しをもって、「教えたい」「聞きたい」という生き生きと話す姿が印象的であった。
- 「対話的な学び」「深い学び」という視点から言えば、授業の後半は、全員の学びとなるために、もう少し工夫が必要だった。友達の発表から、どのように思考を深めていくのか、具体的に子供の言葉で考えると発問や切り返しも洗練されてくる。
- 【協議の質問から】（根拠を示しながら発表させたいが、本を使うとあらずし説明になる。）
- 本で根拠を示した後は本を置き、考えを自分の言葉で話させるなど、発表の仕方を工夫する。発達段階に応じて、段階を踏んで発表ができるようにすると良いのではないか。目の前の子供に合った付けたい力に向かった手立ても検討してくると良い。

4年「くらしの中の和と洋」：酒井 指導主事より

【本時の授業について】

- 学びをつなぐこと、資質・能力を育成することが意識された振り返りが設定されている。
 - ・子供たちが学習活動の中で既習の学びを結びつける場面が見られた。
 - ・自分ができるようになったこと、それがどのような場面で使えるかなど、視点を明確にして振り返らせている。
- 何のために学ぶのかという目的意識（リーフレットを作るという言語活動）が明確になっており、それが子供たちの学ぶ意欲にもつながっている。
- 「引用・要約・自分の考え」をつなげて構成を考えさせる場面では、教室に掲示されていた。前時で活用した例文を繰り返し読ませることで、子供たちにつなぐ言葉を気づかせることができたのではないかと感じた。
 - ・子供の思考が止まったり、躓いたときには叙述に戻る（必要な部分を読ませる）ことが大切である。
 - ・子供の発言から、構成メモからリーフレットに書く文章にするという流れにすれば、適切なつながりの言葉がイメージできたのではないかと感じた。

【単元構想・授業づくり】

模擬授業などの事前準備や予想される子供の発言などを事前に考えていても、授業はやってみないと見えてこないこともある。だからこそ単元構想から授業づくりまでを考える過程の中で、単元を通して付けたい資質・能力を明確にし、1時間の授業の中でめあてとゴールを明確に示すことが大切である。そうすることで、授業の中で何ができて何ができなかったのか、という先生方の振り返りに繋がってくる。中村小学校はその点を大切にしているのも、前時の振り返りが次の授業に生かされている。資質・能力を育成する授業づくりに挑戦することで、その後の授業を更によりよいものにしていこうとしている。

また、単元構想から単元を通して付けたい資質・能力を育成するために最適な言語活動はどのような活動かを検討し、授業者が実際にその言語活動を行うことで、子供の躓きなどをイメージしながら授業を構想していている。そのような先生方の取組が確実に子供の力に繋がっていることを授業の中の子供の姿から感じることができた

2年分科会の様子



4年分科会の様子



6年分科会の様子



6年「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」：宗崎 指導主事より

- フロアからの意見で、「お互いのグループの改善点を言い合っているのに、否定的に受け止めず、相手の意見を気持ちよく受け入れていた姿に好感が持てた。」とあったが、プレゼンテーションをよりよく改善していくためには、周りからの批判的な意見にも耳を傾け進んで取り入れようとする柔らかい心が必要だと言うことは、教材研究の段階でも話題になっていた。そのため、お互いの意見の受け止め方については、本単元に入る前から、授業者が十分に指導してきており、これまでの指導の成果が子供の姿からも感じ取れた。
- 中村小学校の先生方は、単元構想の段階で、「設定した指導事項、言語活動は、この単元で育てたい資質・能力に対して最適なものか。」「設定した言語活動は、その資質・能力を付けるために最適なものか。」ということを考え、常にふり振り返りながら改善し続けている。今回選んだ言語活動は、「プレゼンテーション」であるが、これはこの資質・能力（知技才、思判表AウCウ）を身に付けるための言語活動としては最適だった。「語彙」については、本時の中でも、これまでの授業の中でも、子供自身が辞書や言葉集を見ながらぴったりの語彙を吟味している姿が見られた。「話す・聞く力」については、今日の授業で見られた子供の姿に表れている。
- 教材文をどう読ませるか、という質問があったが、常に授業者も子供たちもゴールの姿を意識している。子供たち自身が「地域の大人に自分たちの提案をいかに分かりやすく伝えられるか。」という目的を明確に持ち、そのために必要なことを教科書教材から読み取ってくるという必要感を持った学びになるよう、この単元全体が構成されている。どの学年でも導入では「これまで身に付けてきたどの力を使えばいいか。」「この単元ではさらにどんな力が必要か。」を子供たちに考えさせ、子供たちの中から出されたことをもとに単元計画を立てているため、主体的な学習になる。これはこれまで中村小学校が積み重ねてきた力であるが、これからはどの学校の子供たちにも必要な力である。
- 「今日の子供たちの言葉からは、何のために改善するのかという目的意識が弱かったのではないかと。」という指摘があったが、そこが本時の評価基準のAレベルの姿だった。まだ単元の途中であるので、常に「プレゼンテーションをよりよく改善するにはどうすればよいか」という課題意識を持たせ、一時間一時間の授業で目指す子供の姿をイメージしながら授業を進めていってほしい。